

## 中国と日本の石敢当

周 星<sup>\*</sup>

### 一. 石敢当の歴史：意義と形態の多様性について

「石敢当」という言葉は西漢の元帝の時の黄門令であった史遊の著した『急就章』に載っていた。『急就章』に対し、よく参考者に引用される部分—「孔何傷，師猛虎，石敢当，所不侵，龍未央」に、「石敢当」という文字があり、常に参考者の目を引いたが、上下の文をもっと詳しく読むと、新たな発見ができる。まず、「石敢当」「所不侵」を読んだら、魔を払う風俗はなぜ伝わってきたのか、これで分かるようになった。次に、「石敢当」は「龍」「虎」との関係も意義のあるものと注目すべきである。風水害に載っているのは石敢当を造る日は必ず、「龍虎の日」を選ばなければならないし、石敢当の造立時間も、「新正寅時」に設定する。更に石敢当碑に虎頭が加刻される例も数多くある。唐代の有名な経学大師、顔師古の「石敢当」に対する注は「衛有石碣，石買，石悪，鄭有石癸，石礎，石制，皆為石氏，周有石速，齊有石之紛如，其後亦以命族，敢当，言所当無敵也」である。顔氏の解釈によると、「急就之例，首陳諸姓，其名字或為新構，非真有其人，敢当蓋虚構二字，与石姓相配為文」となる。顔氏が石という姓を加えたのはその後「石敢当」は人名であるという説に多少の影響を与えたと思われる。

宋朝の王象之が著した『輿地紀勝』と『浦田県誌』などの文献によるおよそ北宋慶暦年間に、今の福建省浦田県で唐大暦五年につくられた「石敢当」石銘を発掘したという文が記録されている。この石敢当が記録上最古のものである。記載によると、この石碑の銘文には「石敢当，鎮百鬼，压災殃，官吏（利）福，百姓康，風教盛，礼楽張（昌），唐大暦五年，県令鄭押字記」と刻んでいる。台湾の学者楊仁江氏の推論説によって、唐の時代の「石敢当」は邪を駆り、煞を止める、厄がえしの機能がある以外には又、民衆の幸福を祈り、村境界の平安を守るといふ公の目的のために設置されたものであったことがその銘文から窺える<sup>(1)</sup>。ところで、関連の文献を参考すると、福建省浦田から出土した石敢当はまだ、謎に満ちている。例えば、碑文は銘刻されたのか、或いは墨書されたのか、石碑は地下に埋められたのか、地上に設置されたのかなどの問題である。この中でとくに注目したいのは一、碑に紀年が載せられた、二、碑文は「石敢当」の三字だけではない。これは多様性が持たられる特徴である。

今のところ保存された年代最古の「石敢当」は南宋の招興年間、福州にある林姓村民が亡くなった親の天国への再生祈願を目的としているため造立したものである。この碑は今福州市山頂にあ

<sup>\*</sup> 北京大学社会学・人類学研究所副教授／筑波大学歴史・人類学系外国人特別研究員

る碑廊に収蔵されている。文物管理委員会の説明による、この碑はもともと高湖江辺村の泗洲仏亭に立った；碑文の内容は以下の通りである。

當	敢	石	
求	命	時	奉
資	工	維	仏
考	御		弟
妣	石		子
生	路	紹	林
天	一	興	進
界	条	載	暉

現存最古のこの「石敢当」碑は以下の若干点が注目される。

- 一. この「石敢当」は仏教との密接な関係がある。これは今石敢当習俗が民間道教との密接な関係があることと相違している。碑を「泗洲仏」に立てた原因は仏教との相互関係の意味を持つかもしれない。今福建省の他の地方に類似の例証が存在している。
- 二. 銘文には「石敢当」の三字だけではない。但し、「石敢当」の文字は横刻されている。これは独立の意味を持っていると思う。
- 三. 「石敢当」と「石路一条」の関係は不明である。
- 四. この碑を立てた動機は後代の石敢当と違っている。

宋元以降、文人の筆記の中に「石敢当」はよく見られた。宋施清臣『繼古叢編』に載っているのは呉地の住民は屋敷が道路に突き当たったら、「石敢当」という文字が刻まれた石人や片石を置き、魔除けをさせる。明の陶宗儀の撰した『輟耕録』には、小道や橋をこえてきた道などが民家の門に当たる場合に、小石將軍或いは「石敢当」と刻んでいる小石碑を造立し、災殃を免れるようにすると記されている。明代の文献『姓源珠玉璣』、『賢奕編』、『群碎録』、『事物原会』などに記されている由来話は五代の時に劉知遠の部下石敢当という人物、彼は生前凶を吉にかえ、危難を防いだとの理由から、のちにその名を石に刻んで橋、道要衝に置く、家の守りとされる。しかし、『旧五代史』卷九十九、『資治通鑑』卷二七九などの文献によると、この力士の名は石敢当ではなく、石敢という人物であった。しかもほかの証拠から証明できるように、五代以前から石敢当の風俗はもう盛んになっていたのである。それで、石敢当は五代の力士の石敢という説は偽話にすぎないと考えられる。ところが、石敢当は古代の勇士の名の説は民間説には重要な位置付けである。この説は今まで台湾、沖縄等の地方にも言われつつあり、ある地方の石碑には「石敢」二文字しかきざまないケースもある。『茶香室叢鈔』、『集説詮真』、『随園隨筆』及び『清稗類鈔』など清代文献の中に「石敢当」、「泰山石敢当」碑を家の門前、部落の入口及び突き当たり所に立

てる；又、「石大夫」、「石將軍」にも称じされた。ほかには「石敢当」碑の上に虎頭の絵が描かれたなど。明清の際に、「石敢当」三文字の前に「泰山」二文字を加刻する風俗が盛んになった。「泰山石敢当」は「石敢当」に遅れ、海岱文化区の泰山信仰に密接な関係がある。

総じて、「石敢当」と「泰山石敢当」の風俗は中国の起源説が一番古い。その起源地区は約二区に分けられる。一つは南方起源区で、福建省を中心とし、もう一つは北方起源区で、山東省を中心になる、この二区の間にある呉地も重要な起源区である。石敢当と泰山石敢当の習俗は南北両起源区の相互伝えるため、不断発展させ、しかも、中国の風水学説と民間道教の影響が受けられた。そうすると、石敢当習俗は始めから形態と意義の多様性があることが明確である。造立場所から見ると、三差路、橋を渡ってきた道、村の入口、巷口、家の門前などに立てられる。碑の形は石人（石將軍）の形もあれば、石碑の形もある。地域性から区別すると、閩、呉、齊魯の地で違いがある。民間信仰の背景について、靈石崇拜、泰山信仰、仏教、道教と風水理論の浸透の影響が受けられた。石敢当の意義から分析すると、避邪する（水平方向上）と煞を止める（垂直方向上）の意味がある。又、幸福を祈り、豊年を求める機能がある。石敢当本来の機能は招福除災であったものが、時代の流れとともに避邪の機能に傾向されることが示された。しかし、台湾では、又、幸福を祈るなどの多様性が残されている。

## 二. 中国における石敢当信仰の分布状況

石敢当と泰山石敢当の信仰は漢民族の民俗文化の伝播とともに全国へ広がったと言える。今、石敢当の風俗や習慣は、新疆やチベットの辺境に住む少数民族を除いて、中国各地で見られる。しかも、漢民族と雑居する満、回、彝など少数民族地区でも石敢当と泰山石敢当の石碑が発見されている。

全国石敢当の分布状況から見ると、東南地区を中心とし、福建省、台湾、山東省などに集中する。福建省の石敢当は石獅王、泗洲仏と道符數令の組合せが特徴である。廈門市の例で述べると、「石敢当」碑に獅子頭が加刻されたり、或いは「石獅敢当」と刻んだり、又、石獅王爺の彫刻を石敢当の代わりにした。突き当たりに置いてある石獅王の機能は地方の無事を守るほかに、旅人の安全或いは子供の病気よけを祈りにくる人々に拜まれている。泉州にも曾て石獅子と泰山石敢当を同時に十字路に置くことが見られた；泉州市西街の十字路に置いてある高さ約62.5センチ、横30センチの「石敢当」碑は紅色を塗ってある。浦田地方の石敢当碑は常に仏龕の下に置いてある。当地の人々は早晩に線香を上げ、除災と幸福を祈る。又、浦田市風山街湖岸巷にあるT字路の突き当たりの壁の上に小さな龕の中に石材の泗洲仏像が置かれて、その下に「石敢当」の文字が嵌め込まれている。福建省の石敢当は「石敢当」あるいは「泰山石敢当」だけを刻むものもあれば、八卦図案、道符數例、「南無觀世音菩薩」などが加刻されたものもある；地表に立ったり、壁に嵌め込んだり、板に墨書したり、紙印刷したり、又、「石制沖」という碑を「石敢当」と門前に並べるのもある<sup>(2)</sup>。それは、巷の入口、出口<sup>(3)</sup>、路地の突き当たりに門前屋敷の角、十字路、

三差路に置かれた。

ところで、台湾における石敢当の風俗は、福建省のと大同小異である。台湾の学者王孝廉氏は、閩南人は明朝鄭成功と台湾に渡ったとともに、石敢当の風俗が台湾に伝わってきたと指摘している<sup>(4)</sup>。従って、石頭公の信仰も生まれてきた。台湾石敢当の設置場所は、浜辺、河や池の岸辺、船渡り場、村の入口、村落の四つ隅、巷の入口、門前、十字路、大木や竹藪の下、橋のたもと、溺死者の所、病人や死人の続出する家などである。その機能は、邪気払い、風を退去させる、除災、難点を取り除く、不祥を解く、又、幸福を祈る、豊年を祈る、平安を祈る、長寿などに集中するようになった。日本学者の国分直一氏が著された『祀壺之村』（壺を祈る村）によると、石敢当と泰山石敢当は煞を止める意味があり、その上に太極八卦の図案が加刻され、怪物の顔面（獅面？）<sup>(5)</sup>、道符咒語或いは北斗七星が付け加える例がたくさんあることを述べられた<sup>(6)</sup>。その中の一例は、約三百年の歴史があり、村民のために「社衆弟子」が公設され、その上に「李広將軍」などの文字が刻まれた。楊仁江を始めとする諸氏の調査と研究によると、台湾の石敢当は非常に豊富で、様々な形がある。石敢当碑の上に八卦、劍獅、北斗等を加刻する以外に、正面に「石敢当」を刻み、碑の裏に「南無觀世音菩薩」を加刻する、或いは「泰山石敢当」と「南無觀世音菩薩」を一緒に刻む；又、「太山岩、石敢当、阿弥陀仏」、「泰山石敢当、安之光明」などの文字が刻まれたものもある<sup>(7)</sup>。碑の大きさ、文字の多寡、彫刻やら墨書やら、材質の種類などにも多様性がある<sup>(8)</sup>。更に、花蓮県静浦村あたりの売店では「泰山石敢当」が書かれた紙を門前に張るケースも見られた。台湾の石敢当に対し注目したいのは一、澎湖、台南等の所に、集落の四つ隅、公衆施設で公設の守り神となったり、私的に門前、屋敷の角に置かれる。二、設置する場合は道士或いは堪輿家の指導で設置された。三、石敢当の崇拜について、避邪すること以外、不祥事件、意外の災、商売不振などがある場合は石敢当を造立するによって、解くことができるようである。ある所に子供を健康成長させるため、石敢当を仮り親としたこともある。四、石敢当に対する供える線香が盛んである；石敢当碑の下に祭壇が祀られたり、陰暦の毎月の一、十五日に線香が供えられたり、お正月、お盆の時にお肉、ご飯、お菓子、お酒などのご馳走も供えられる。更に、石敢当を神格として崇拜し、芝居が上演され、感謝の意を表す（写真1～2）。

山東省各地では、陽宅が邪気にされた時、その邪気を払う手段のひとつは泰山石敢当を造立することである。道路、巷、山の背、河や川、川溝、塔廟などは住宅を傷付けやすいと人々が信ずるため、鄭城あたりに、人々は垣壁を小さな洞に龕を入れ、なかには「泰山石敢当」が書かれた青い磚を立て、招福除災をする。魯西北に、人々は「泰山石敢当」、「太公在此」が書かれた青い磚或いは板を壁に掛けたり、嵌め込んだりし、これを住宅の煞を止めることができると信じられる。泰安などの地方では、「泰山石敢当」の信仰は一般的である。屋敷が邪気に侵されなくても、“万が一”の心理予防のため「泰山石敢当」が設置される。村の入口、巷の入口<sup>(9)</sup>、住宅などの所以外に、山東省の「泰山石敢当」は大部分、壁に嵌め込まれた。石碑、青い磚など以外にも、石人像があり、その像の上に文字は書かれていないが、「泰山石敢当」の代わりに設置されたのである。このようなケースは古代の文献にも記録された。

華北と東北各地にも大勢の石敢当に関することが報告された。河北省藁城市耿村及び周辺の人々は路巷が箭を譬え<sup>(10)</sup>、安全を守るため、壁に「泰山石敢当」或いは北岳「衡山石」が刻まれる。河南鄭州に、「石敢当」を「右敢当」或いは「右致富」と刻まれたこともある。北京にも「劍獅泰山石敢当」というケースが報告された。中国東北地区には「泰山石敢当」の上部に虎頭が加刻されるのがよく見られる。そのほかに屋敷の後ろ、路線の側や橋のたもとに置かれたり、建築物の礎石に使用されたりしていた。

西南地区における石敢当は地方の特色がある。四川省の場合は虎面泰山石敢当、大極泰山石敢当のほかに、石虎、石獸の胸に「泰山石敢当」、「呑口」と「泰山石敢当」の組合せが刻まれるものもある。「呑口」というのは門の上部に掛けられた虎頭額或いは虎頭碑のことである、それとも「饜餐」の音便である。虎頭碑の上に「泰山石敢当」の文字を加刻すると、避邪鎮煞の機能はもっと強くなると信じられる。貴州にも呑口泰山石敢当の報告がある；溺死者、高い岩や険しい坂から転落死者の事故現場に「石敢当」を設置し、しかも、事故現場と真っ対面すると、事故がなくなるようになる。四川と貴州の石敢当風俗は多くの地方誌に記録されていた。日本学者の鳥居龍藏氏の雲南省での早期の調査によると、石虎の胸に「石敢当」の文字を刻み、屋根のうえに置かれ、避邪鎮煞の風俗がある。宣威などの所に、「石敢当」というのがあるが、これは指路碑と石敢当碑の組合せになるのだろう。筑波大学歴史人類学系の佐野賢治氏は昆明郊外の高橋村（彝族）で実地調査を行い、地元の民家の門の上部に紅紙符が張られたと記録された。符に陰陽太極八卦、元始鎮安、白虎、青龍、土地、財神、太歳などと「泰山石敢当」の組合せが見られた。

華中、華南地区における石敢当の風俗は同じく、盛んである。安徽省の民家は「門不沖巷」の原則を守っているが、もし、どうしても避けられない場合は「泰山石敢当」、「鎮山海」を造立する。皖南の人々が伝わるのは「泰山石敢当」は生活安定、商売繁盛、人口増加するなどができる。江西南昌の売店は、常に「石敢当」或いは「泰山石敢当」をカウンターの外側に嵌め込む<sup>(11)</sup>。昔、湖北省武昌黃鶴樓の所にも聖石の上に「泰山石敢当」が刻まれたのが報告された。広東<sup>(12)</sup>と香港では人々は風水説を信じ、「泰山石敢当」を造立し、祭祀する場合が多いのである。

江蘇、浙江両省は石敢当風俗が盛んである福建省と山東省の間にあるため、昔から今まで石敢当の信仰がずっと広く伝わっている。江蘇省の揚州、儀徴、蘇州、鎮江、呉県、連雲港などの地では、八卦泰山石敢当碑、泰山石敢当碑、石磨盤、大極石、山海鎮、太公石などの鎮物が見られた。太公石というのは石の上に「太公在此、百無禁忌」などの文字が刻まれたものである。灌雲県にある所の「飛將軍」碑の上に、「敕賜李広將軍在此」などの文字がきざまれた、この碑は村口に置かれ、邪気をはらうためである；台湾にも類似の発見が報告された。浙江省各地では、虎頭牌泰山石敢当（金華）、門の上部に横に書かれた「泰山石敢当」、虎面泰山石敢当碑（麗水）<sup>(13)</sup>、八卦獅面（虎？）泰山石敢当などの形態以外に、「泰山石將軍」の神碼、すなわち「紙馬」がある。沖縄国際大学の小熊誠氏は温州若頭郷芙蓉村で実地調査を行い、壁に「泰山石敢当」碑が嵌め込まれ、紅色の顔料で壁に「泰山在此」の「碑」が描かれたと記録された。下野敏見氏の報告によると、温州市にある「泰山石敢当」碑に加刻された獅頭の額に“王”という文字がある、虎に似

ている；“王”の文様と“泰山石敢当”などの文字も常に朱或いは紅色が塗られた。

中国における石敢当と泰山石敢当の実物は十年の文化大革命の影響でほとんど破壊された。ただし、七十年代末から、各地には又、この風俗を回復させようという状況があった。上述の日本学者達は雲南昆明郊外と浙江、温州で事例を収録した以外に、鹿児島大学下野敏見氏は1986年に福建省、浙江省、上海などの地区で十四個所の石敢当の実例を収録された<sup>(14)</sup>。楊祖煌氏も莆田市内で数例の「石敢当」が発見されたと報告した。そのほかには、新しく造立された石敢当は河北、山東、浙江麗水などにもあると研究者に報告された。石敢当風俗が重視されるのは明らかである。この点から結論を出すと、有形の宝物が一時に破壊されても、無形の民間信仰は長期的に人々の心に存在し、簡単に失われない、ある日、条件が揃えたら、再び、物に甦ると言えるだろう。

### 三. 石敢当における民間伝説

石敢当風俗の意義については、文字資料だけでなく、口碑や伝説を媒介として民間に伝達されている。郷土社会の人々は石敢当の民間知識について民間伝説などを通し、様々な変化ある新しい解説が生まれてきた。これらの解説は科学的ではないかもしれないが、民俗学の研究に対して重要な筋道である。そして、石敢当についての伝説をいくつか紹介したいと思う。

まず、台湾の伝説では、唐の時代にある寡婦は夢で自分は石將軍と交わったのを見た、その後、一人の子が生まれた、順孝という名を付けた。順孝は力持ちで、母親に非常に親孝行した。かれは曾て、猛獣を打ち殺して、母親と継父を救った、しかも、官府から賞をもらった。人々は彼の勇猛を記念するため、石が立て、石姓を与え、これを邪気払いにした。

第二話は福建省洛陽橋の伝説である；ある村に石敢当という菜農がいた。彼は観音菩薩の化身である美女に教化され、彼を水陸の守護神にし、壁の下或いは橋のたもとで、人々を保護させようとしたのである。今、洛陽橋上の小石人は、最初の石敢当だそうだ。

第三話は広東省にある伝説である；康熙年間に、県令が在任中に次々に死んでしまう。後から道士に調べさせたところ、官邸はある寶塔の影に鎮圧されたということだったので、道士の言にしたがって「泰山石敢当」碑を造立し、碑の力を借り、宝塔と対抗した。

ちなみに、山東省における泰山石敢当の民間伝説の形態が一番多いとみられる。まとめてみると、主に驅妖型、驅妖治病型、驅鬼型、皇帝の行き先が止どまれた型、友情型など<sup>(15)</sup>がある。

驅妖型の泰山石敢当についての物語は、泰山の所に石敢当という人がいた。彼の職業は文字占いをし、八卦見をし、驅妖をする専門家である。彼の法力は妖怪さえ怖がっているため、ついに江南、福建、東北へ逃げ出した。妖怪の被害にあった地方に住む人々は妖怪を追い出そうと石敢当を頼ったが、石敢当は忙しいため、行けなかったが、石の上に自分の名と出身地を刻んだら、妖怪を追い出すことができるとし、平安を守れると皆に教えた。それで、各地で泰山石敢当を造立する風俗が広まったという。

驅妖治病型の物語では、泰山に住むある薪を取る青年が石敢当という。彼は力持ちで、たくましい。ある日、お金持ちのお嬢さんが妖怪に襲われて難病が掛けられた。石敢当はお嬢さんの難病を治した。その後、お嬢さんと結婚し、幸せな生活を送った。村の人々は石敢当が驅妖除病することができるため、彼の名が刻まれた石碑を立て、鎮物とした。

驅鬼型の伝説は前述の二つに似ていて、同じく、泰山石敢当は人名の内容である。皇帝の行き先が止どまれた型は、唐太宗が泰山に登る時に、山道が険しいため、回馬嶺で下馬せざるをえなかった。「泰山石は私を阻んだ」と唐太宗が言った。泰山の石は皇帝様さえ阻めるなら、妖怪邪悪も鎮圧することができるだろうとの人々の考えである。類似の物語は福建省にも伝わる。

友情型の物語は次のようである。内容は泰山と石敢当は友情の深い友達で、人々は二人の友誼を記念するため、碑を立て、ふたりの名が刻まれた。二人を一人にして、団結させ、怖いものなしの意義があるようだ。

各種の民間伝説の中で、驅妖型、驅妖治病型、驅鬼型の方が説得的で、解釈力がある。しかし、物語自身は解釈と説明の機能がある以外に文化的な意義もあると思う。例えば、台湾の伝説は、倫理に溢れる色彩が多く、漢民族の民衆真理に相応する。閩南の伝説は菩薩の力を借り、石敢当を神化させ、これは多少仏教が民間文化に混じっているという表現である。驅妖型の物語に表すのは、石敢当は郷土社会のある神力を持つ職業者である；この物語の面白い所は「泰山石敢当」の伝わるルートを解釈しようとした点である。驅妖治病型の場合は古代の「石大夫」の伝説に繋がっているし、郷土社会にある理想生活を反映した。山東省地区の民間伝説では、いつも泰山を石敢当と繋げようと説明している、この点から、山東における石敢当風俗は泰山信仰に結び合う文化背景があるとわかる。皇帝の行き先が止どまれた物語も同じく、泰山と泰山の石の偉大さを強調したいのである。

口頭文学による石敢当に対する解釈が見られる以外に、郷土社会生活の指導者であり、すなわち、風水師と堪輿家たちの解釈も重要である。郷土社会の知識人として彼らは、石敢当に対する説明に住宅建設や民俗文化の中に大きな影響を与えた。風水師が持ち伝えてきた伝説と風水書に載っている記事には「神話」の色彩が濃い。ある観点から見ると、これを民間道教神話の一部と理解することができる。

又、一説の神話で、蚩尤は泰山に登って、天下を小さく見て、自信満々「天下には、誰が向こうところ敵なき？」といった。これを聞いた女媧は天から「泰山石敢当」と書いた石を投げた。その後、黄帝は各地で「泰山石敢当」を造立し、蚩尤はついに涿鹿で敗戦した。その後、「泰山石敢当」は避邪する神石の存在になった。この神話に蚩尤は反面教師の印象付けで、泰山の石は正義と力の象徴である。

もう一つの神話では姜子牙が文武王を補佐し、紂を滅ぼし、死後「泰山石敢当」が諡号された、鬼門関道を守らせる。又、『封神演義』に姜子牙（太公）はたくさんの神様を封じたが、自分の神立を残すのを忘れたため、玉皇大帝は彼に瓦老爺を封じ、民家の安全を守らせ、権力はあまりないが、世間の人々に崇拝され、祀られた。姜子牙に関する神話から、「泰山石敢当」と「太公石」

の結ぶ関係が見られた。ある地方の民間伝説に、太公望呂尚は石敢当と石將軍の本名で、「泰山石敢当」は彼の神名であると伝えられた。或いは、石敢当は姜子牙の靈魂で転生したものであるという説もある<sup>(16)</sup>。石敢当の例から見ると、「姜太公在此」「泰山石敢当」が一緒に刻まれた例もあれば、「姜太公在此」或いは「太公在此」のみ刻む場合も「泰山石敢当」と称された。しかし、民間鎮邪風俗の中に、泰山石敢当と姜太公はそれぞれの神力が持たれたため、避邪する神力もそれぞれである。注目されるのは石將軍は必ずしも姜太公であるとは限らない、李広、石敢を指すかもしれない。更に、山東半島などにおける石將軍と朝鮮半島で村口に立てられた「天下大將軍」などは、文化的な繋がりがどうか、今まだ不明である。

日本の与那国島にも「石巖当」の物語がある。昔、島のある所に大きな石があった。ある日、この石が二つに割れた、その割れ目から馬面人が生まれた、島の人々は、彼を怖がるため、彼は海を渡って、唐へ行った。唐主は彼に武術を授与したし、「石巖当」という名を命名してあげた。この話は与那国に伝わってきて、与那国の人々は「石巖当」を造立し始めた。この物語から、注目したいのは、一つは「石敢当」と中国の繋がりが、もう一つは石敢当は古代力士の名という説の由来に影響を受けたのがこの物語に伝わったことである。ところで、この「石巖当」の故郷は中国ではなく、日本の与那国である。

#### 四. 日本の石敢当

石敢当の民俗は漢民族の海外移民とともに中国文化も海外へ伝播した。シンガポール、マレーシア及び東南アジア諸国の華僑居住地区に信仰された以外、海外で石敢当信仰が一番盛んなのは日本である。

日本学者の小玉正任氏と窪徳忠氏の紹介によると、今まで、全日本47の都道府県の中、24の都道府県で石敢当の石碑が発見された。南は沖縄から北は青森と函館までだが、その分布は沖縄県、鹿児島県と宮崎県に集中している。

日本の石敢当にはたくさんの紀年銘文がある。松田誠氏のまとめによると、約28例がある<sup>(17)</sup>、その内、鹿児島県は16、年代は元文四年（1739、写真3,4）から、文久元年（1861年）までのものがある；宮崎県は2、沖縄県は2、埼玉県は2、京都は2、徳島県は2、熊本県1、滋賀県は1である。いまのところ紀年銘のある日本の石敢当の中で一番古いものは、宮崎県の元禄二年（1689）のものである。沖縄県では一番古い石敢当は久米島で発見された雍正11年（1733）の「泰山石敢当」である。これらの紀年銘文から、昔、石敢当を造立する時に吉日を選んで造立したと見られる。松田誠氏は各種文献の記録の分析から、大分県臼杵市にある石敢当は更に古いのではないかと推測された。この中で注目したいのは、元禄二年の石敢当は造立者と石敢当の造立動機が刻まれていた；それは「孝弟子十六人中」が保寿院第五世の僧侶大法師の恩に報いるため、造立されたとある。造立の日付はお盆明けの十八日に造立したもので、下野敏見氏はこれは鎮妖、靈魂信仰に密接な関係を持つのではないかと指摘した。当時、石敢当と密接な関係を持つ



は真言宗で、造立者は集団性の特色がみられた。

日本本土の石敢当信仰は、いうまでもなく中国から伝わったものである。伝わってきた時期は遅くても約十六世紀初、中期である。大永五乙酉年（1525）八月に大友家臣高崎五郎左衛門鑑元（法名願正）は屋敷を立てる時に、大明隆子玄（正徳六年の大明進士）が「石敢当」の三字を送って、しかもそれを屋敷門の東側にたてるように教えた。『豊後国誌』に、臼杵市豊屋町の石敢当は、天正三年（1575）日本へ行商にきた明朝の承認が造立したと書いてあった。ところが、石敢当の民俗が沖縄に伝わった歴史はもっと早い。十四世紀以来、琉球王国は中国明朝の冊封体制を受けたため、中国とは密接な関係があった；それで、中国の風水思想が琉球の歴史に入ってきたのは十三、四世紀以前に溯ることができる<sup>(18)</sup>。証明できるものによると、石敢当の民俗は十五世紀の中期に道教と同時に閩南の移民とともに沖縄に伝わってきたのである。

中国大陸の石敢当の民俗が日本に入るルートは、日本の石敢当研究者松田誠氏がおっしゃったように、多元と複数である。記録によると、厦門から台湾、琉球を経由し、奄美諸島を経て、南九州にはいる伝播ルートが考えられるようである。しかし、中国大陸から伝播するルートは必ずしも厦門から出発とは限らない、中国東南沿海部のどちらからも可能である。更に、中国大陸から直接日本本土に伝播した、或いは朝鮮半島を経由し、日本本土に入る可能性もある。朝鮮半島伝来説は九州地方に流れていたが、いまのところ、朝鮮半島における石敢当に関する情報はあまりないので、この説はまだ明確ではない。

具体的に石敢当の伝来ルートを挙げれば、もっと複雑になる。例えば、台湾から琉球まで；首里から那覇、沖縄本島各地に至って、ついに宮古、八重山諸離島；十七世紀初期、南九州の薩摩島津が琉球に侵入し、そして、琉球から石敢当の民俗を本土に持ち帰った；薩摩あたりの石敢当は琉球人館の旧所である京橋から伝播し始まったようである；又、九州から北部各地へ、あるいは修験道から薩南諸島への伝播などの仮説もたくさんある。

次に、石敢当の伝播方式についての説も多種多様である。大分県臼杵市だけでも石敢当に関する伝説は多くある；明朝の商人が持ってきたやら、大明の人が造立したやら、朝鮮人である玄心という名の人が立てたなどであるが、別の説では願在の弟、願得が長崎から持ってきたものもある。総じて、九州に住む明人（華僑）たちは石敢当風俗の伝播に重要な役割を演じたのは間違いない。松田誠氏は、石敢当と天妃信仰などが南九州に伝来したルートは、当時の倭寇海賊の乱によって導入されたのとの関係があると述べた。鹿児島にある古い石敢当はほとんど山麓にある武家や士族の集落区に分布する（写真5～7）、このことから当時の信仰者と伝播される社会階級層は漢文知識を持つものに限るのではないかと推測することができる。その根拠として、商人、武士、修験者、僧侶、漢方医、郷土知識人の古い者、術士などの人間は石敢当の伝播に密接の関係がある。例えば、秋田市にある石敢当は長崎で蘭学を学ぶ医者が持ち帰ったようである；青森県平賀町の石敢当は江戸時代の末年に漢方医が造立したものである<sup>(19)</sup>。石敢当の伝播方式はもちろん、上述の方途だけではなく、現代でも伝播しつつある。例えば、沖縄出身の女性は本土へお嫁に行き、石敢当の民俗を本土へ持っていった例もある。下野敏見氏は中国の複合型の石敢当民俗は新しい

ものとは言え、沖縄では獅子と石敢当を別にするのが古い民俗である、と指摘した。これは文化圏説の伝播論の解釈によると、あたりまえのことかもしれない。日本の場合は「泰山石敢当」よりも「石敢当」のほうが多い現象もこの説で解釈することができる。

日本各地にある石敢当の造立された場所や造立目的などを、大ざっぱに言えば、中国とは大同小異である。すなわち、道路の突き当たりに置かれ、避邪のためである。石敢当信仰の観念から言えば、沖縄における石敢当信仰が一番強い。特に最近、石敢当「熱」が盛んになっている（写真8～15）；離島では自然石の上に「石敢当」を刻む習慣は昔から現在まで伝承し続けている（写真16～19）；鹿児島の場合は古いものもあれば、新しいものもある（写真20～24）；南九州から北へ行く地区のものは主に旧時代のものが多い。ようするに、日本の石敢当の分布状況は南から北へ逐次に減っていく。松田誠氏は日本本土、南九州地区で石敢当を造立する目的は主に避邪のためだが、南九州から北へ行くと、造立の目的は「除災招福」のためである。この区別は地区の分布状況、間接或いは直接伝播ルートの影響を受けた結果である。間接伝播と言うと、石敢当の民俗は琉球文化圏で受け入れられ、琉球文化と結合してから、南九州へ伝わったのである；直接伝播の場合は、中国から直接本土へ伝播した。南九州とその北地区における石敢当を造立する目的は本当に「避邪」と「除災招福」の違いであれば、それは石敢当の伝来時期によって伝わってきた信仰の内容も違うと言えらるだろう。

石敢当民俗は琉球と日本本土に伝わった過程で、大体石敢当の本来意味を持ったが、琉球文化と日本文化の浸透である程度改造され、新しい意味が含まれた。ようするに、石敢当の土着化された過程で日本各地である類似、同じ、違い文化を混ぜた。それで、今中国の石敢当文化と日本の石敢当文化は類似のものもあれば、相違の所もある；類似点はT、Y字路の突き当たりに設置するなど、相違点は日本では虎面石敢当が少ないし、石敢当はお寺と神社に設置されたなど；しかも、時代の変遷とともに、石敢当に対する解釈も次々と変化している。中国福建省にある石敢当と石獅子の組合せは密接な関係があるが、沖縄の場合は、基本的に獅子と石敢当は別々な分担役の存在である；獅子は屋根を守る、石敢当は道端に立つ。最近、沖縄の方は石敢当に対して、新しい解釈ができた、それは交通安全と関係があるそうだ<sup>(20)</sup>（写真25、26）。石敢当の材質から見ると、沖縄地方では、石よりセメント製品、プラスチック製品、板製のものが多く見られる（写真27～30）、それに石敢当既製品が小さくなる、飾る効用が発達し、地表に設置するより壁に張るのが多い傾向にある。一般的に言えば、日本人は石敢当を神格化しないし、祭祀する対象にもならないのだが<sup>(21)</sup>、沖縄、鹿児島と宮崎などの地では、水、線香、花、草と銭などの供え物を石敢当に供える実例がよく見られる；ほかには石垣島では、肉を埋め、石敢当を祀った実例もあったようだ；鹿児島県谷山区と金峰町では、「石神散」「石神当」の報告がされたことがある。それ以外、鹿児島で約三分の一の石敢当が「石散当」と刻まれた、これは一体同じ造立者の誤りなのか、それとも、鹿児島の人の石敢当に対する独特な理解なのか、いまのところはまだわからない。中国と日本の石敢当文化の中にも、このような微妙な所はたくさんある、次に日本にある石敢当の独特な例を出し、今後の石敢当の比較研究に筋道を立てる参考にしたいと思う。

沖縄県石垣市立八重山博物館に、乾隆年間の石敢当碑が収蔵された碑の上に「泰山石敢当，姜太公在此」がぎざまれた（写真31）。

沖縄県北中城村にある「山石敢当」と刻まれた碑は、琉球王国尚泰王時代の作品であるかもしれない、忌み避けるため、わざと「泰」が抜けたのではないかと思われる。宮崎県山之口町にも「山石散当」碑が発見された、ちなみに沖縄県読谷村歴史民俗資料館の前にある「泰山石敢当岩」碑からの連想で、この「山石」の二文字は「岩」の字にすることができるかもしれない。

沖縄波照間島で、左右の石の上に別々に「泰山」と「石敢当」が刻まれた作品がある。

沖縄各地の石敢当に「石巖当」「巖石当」「石垣当」が刻まれたものもある。「石垣」と「石敢」の発音は比較的に近いである；石垣は即ち、石の壁である。石垣にも邪を驅り、煞を止める機能がある、沖縄各地にある石照壁のように（庭の正門と屋敷の門の間にある低い壁、屏風ともいう）、石敢当を石垣のなかに嵌め込むと、「石垣当」とは言えるだろう。

鹿児島県鹿児島市下荒田二丁目のT字路の突き当たりに置かれた石の上に、「石当」二字だけ刻まれた。

鹿児島県浦生町内の何か処で、「心石敢当」碑がある、これを信じる信者は修験道の密教（山伏）に関係があるかもしれない。

鹿児島県栗野町東下場宗方民家の所に梵字の「石敢当」がある（写真32）、この上に紀年銘文があり、「明和五年戊子九日吉日」（1768）という文字が書かれた。類似の梵字石敢当は、大口市と浦生町などに見られた。梵字を使う者はほとんど修験者、僧侶などの知識階級である<sup>(22)</sup>。

鹿児島県喜界町にある石敢当碑は「石敢当」の下に九字符（𠄎）が加刻されたケースが多く見られる。これも修験者に関係があると推測された。

鹿児島県吹上町のある処で、一つの石に「猿田彦命」と「石敢当」が刻まれた。

鹿児島県高尾野町で王仁像に「石敢」二字が刻まれた。

鹿児島県吉松町の数か所で陰陽石の上に「石散塔」が刻まれた。

鹿児島県大根占町で一つの石碑三面に別々「金神」「水神」「石敢当」が刻まれた。

鹿児島県吉松町の三差路の突き当たりに「辻岩」の二字が刻まれた自然石が置かれた。

鹿児島県知覧町武家屋敷処にあるT字路の突き当たり所に、耳型の「無字石敢当」が置かれた<sup>(23)</sup>（写真33）。

宮崎県高城町で、塞神と並べている「石敢当」がある。

長崎県諫早市八坂町のある所に「水神宮」と一緒に刻まれた「石敢当」がある、この石敢当は「恵比須」神とも並立された。

鹿児島県指宿郡穎娃町小字中園にある篆字で刻まれた「石敢当」；この横には水神なのか、恵比須神なのか分からないが石造像がある（写真34）。

徳島県小松島中田町成願寺の前に「石將軍敢当」碑がある。同市の赤石町、徳島市津田町、兵庫県淡路島の南淡町にも「石將軍」碑が発見された。類似の碑文は中国の山東と台湾などにも見られた。

京都南区陶化小学校の前庭にある石灯籠の上に「石敢当」が刻まれたものがある。これは明治維新の時に京都伏見の銭取橋あたりに夜間、盗賊の出没があり、住民と旅人の安全を守るため、商人の寄付で、この石灯籠が造立されたようである。

埼玉県北埼玉郡龍興寺山門入口で、石橋とともに供えられる「石敢当」がある、この右側には「石橋施主回心」などの字が刻まれた。銘文によると、この「石敢当」の造立年代は明和八年(1771)である。

埼玉県加須市加須千方神社の境内にある「石敢当」碑に雲龍の紋様が刻まれた。この碑の背面には長編の説明文が載せてある、その中に、石敢当を「巷陌橋道乃衝」の所に立てれば、市には禍事なし云々と書かれていた。この石敢当は文化十四年(1817)丁丑冬十一月長至日に立てられた、しかも当時有名な漢学家と書道家である鵬齋陳仁興が「石敢当」を書いたのである。この石敢当は曾て、市の神様のように崇拜されたことがあるそうだ。臼杵市にある石敢当の伝説のなかにも石敢当を市の神様として、市の災厄を取り除くことができる内容もあった。ほかには、石敢当と恵比須神の関連についても注目されており、恵比須神はもともと漁神であったが、江戸時代になるとだんだん商売繁盛の神様の役目になっていった。今、台湾、沖縄にも商売不振の時に「石敢当」を立てるケースがみられる。

山形県鶴岡市の「石敢当」は旅行の安全を祈願するために立てられたそうだ。類似の解釈は鹿児島県の東串良町と中国の廈門市にもある。

滋賀県高島郡安曇川町に道標の役割として立てられた「石敢当」がある、これは鹿児島県東市来町と中国雲南などの地にも見られた。

秋田県秋田市には「敢当石」、「敢当」、「石敢」などを刻んだケースもある。話によると、秋田市の「敢当石」は止風の機能があるようだ。この点は鹿児島の石敢当の風神説と台湾の石敢当は「止風止煞」という機能があるのは共通点がある。「敢当」だけ刻まれた例は鹿児島の金峰町などにもあった。

## 五. 石敢当における民間信仰の基本原則について

中国の学者の石敢当に関する研究は半世紀前から始められた<sup>(24)</sup>、その時の研究は文献にある記録に基づいて、石敢当民俗の起源などを整理しただけである。残念なのその後、研究は持続しなかったことである。文化大革命後の出版物の中でも、たまに触れられるぐらいで、「石敢当」民俗が載せられた、実地調査はほとんどなかった。現在、石敢当を研究する中国人学者の中では、台湾学者の楊仁江氏が一番成果をあげられたと考えられる。楊氏の研究成果は二点に纏めることができる。

- 一、台湾石敢当風俗に対する実地調査から、石敢当を分類した。
- 二、石敢当は郷土社会における村民心理防御体系の一つと指摘した。石敢当のしるしは精神的な防御系統のように、人々の心の中に存在し、これは有形な物質の安全系統と対応する。

楊氏の理論及び台湾にある集落周辺の石敢当が設置された実例を分析すると、郷土社会における集落の「心理安全」モデルが予想させられる。

公設石敢当	公私兼設	私設石敢当
村 口	巷口路傍	門 口
外 側	中 央	内 側

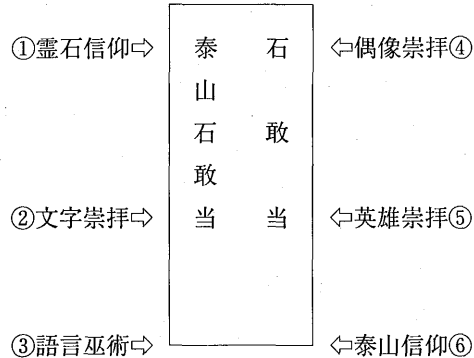
そうすると、各家庭の立場から見れば、人々は三重の同心円の安全系統の中にいるとは言え、村外から家まで、心理的な安全は逐次に増強してきた。もちろん、村落と住民に対する有形な防衛系統は壁、壕、籬、門などもその一例である。ところが、この「モデル」は単なる心理安全体系の構成要素の一つ、全てではない。ようするに、石敢当は複雑性があるため、石敢当と他の鎮物の相互関係も研究すべきと考えられる。中国と日本の石敢当民俗における民間信仰の基本原理或いは規則を整理したら、石敢当民俗における複雑現象が理解されやすいだろう。先人の研究成果を辿ると、石敢当民俗における基本原理は四点に纏められる：

#### (一) 神性を加える原理

郷土社会にある現実主義は、民間信仰にある各種鎮物の相互関係を支配した。石敢当はただ大勢の鎮物の中の一つである。それで、同じ或いは類似な鎮物が付加されたら、もともとあった神性或いは法力はもっと勢いが強い、これは神性を加える原理と言う。例えば、虎、獅、太局、八卦、泰山、照牆、武器、北斗七星、梵字、鏡、符咒など、これらの神力を象徴する符号は石敢当に付加させたら、石敢当の効果はもっと発揮される。(写真35, 36)。「石敢当」と「石敢当」お互いの付加にも使われる。『本草集解』に載った、「虎知冲破」；中国の民間信仰の中に、虎は道教張天師の象徴に表す。虎面を石敢当碑に加刻されるのも石敢当の機能を強化するためである。中国海南島で、溺死者投身自殺者の所に碑が造立された、この上に「南無阿弥陀仏」が刻まれた。このように台湾、福建省では、「泰山石敢当」と「南無阿弥陀仏」が同じ碑に刻まれる意味が理解されやすいだろう。温州市百里東路、浙江永嘉県羅浮区、塘頭村、東方村では「獅頭（虎？）泰山石敢当」碑の獅面額部に「王」字（そして、虎に似ている）が加刻された、「王」と「泰山石敢当」の文字は常に朱或いは紅色の顔料が入れられた。紅色は中国の民俗の中に避邪力に強い、だから、神性を加える原理の例証に出せる。石敢当碑に紅色を塗る実例は台湾澎湖島赤嵌村にも見られた。神性を加える原理に関連する鎮物の間に組合せの関係ができる以外に、相互置換関係もできる。

## (二) 複合構造原理

石敢当は民間避邪民俗の中の一つであるが、その中身には種類と要素が違う民間信仰が含まれる。言い換えれば、石敢当民俗の複雑性はおもに自ら複合構造があるためである。石敢当の複合構造を分析すれば、石敢当の意義が明確化されると思われる。まず、石敢当或いは泰山石敢当の複合構造モデルから分析したい：



- ① 靈石信仰：「泰山敢当」，「敢当」しか刻まない，「石」が省略された。泰山の石靈力の伝説。「無字」石敢当など。
- ② 文字崇拜：セメント，プラスチック，板製，紙に「石敢当」あるいは「泰山石敢当」が刻まれたり，書かれたりした。これは文字を通し，効力を發揮させるためである。
- ③ 言語巫術：石敢当に挙げられた実例の中に「東」「堂」「塔」「灯」などとあり，これは必ずしも誤字ではない。これらの発音は「当」に近いあるいは別な言葉と同じかもしれない。民間物語に妖怪は石敢当の「名」「声」をこわがる説がある。沖縄人が，石敢当が中国人の名で妖怪はこの名を聞くとこわがるという説が信じられる。
- ④ 偶像崇拜：石人形の石敢当。
- ⑤ 英雄崇拜：石敢当の人名説。石將軍。「石敢」だけ刻まれた石敢当。太公石など。
- ⑥ 泰山信仰：石敢当は泰山諸神の一つの説。泰山の石は一般の石と違う説など。

## (三) 変遷による変異される原理

石敢当民俗は歴史の変遷と伝播される過程に，本来的な避邪の意義が保持された以外に，時代と地域の違いによって，多少変異された。石敢当が空間伝播するにも時間がかかるので，文化圏論の方法で石敢当民俗の地域性を解釈することができるだろう。変遷による変異は，地域性の違いによる外来文化を受容する程度と改造される過程に関わる。山東地区では，一つ変遷による変異の仮説が立てられる。これは泰山石信仰⇨泛石信仰⇨語文巫術に関連する。必ずしも石の石敢当ではなく，セメント或いは青い磚の上に「泰山石敢当」に刻まれるかもしれない。しかし，

この仮説は別な地域では成立しないかもしれない。日本の南九州では一部分の石敢当は市の神様の性格を持ち、一部分は修験者の秘術の一部となっている。

#### (四) 民間解釈原理

世間の人々の石敢当に対する解釈は絶えず、間断なく、生み出される。その原因のひとつは、石敢当の本来意義を保ってほしいし、又、変異させ、新たな生命力を得させたいのである。もともと本地にある同じ或いは類似の現象を、外来の「石敢当」文化を解釈する場合は土着化させる方式の一つである。口承文学の解釈はまず、非知識階級層の人々の認知に合わせるため、認知上の合理性を原則として（石敢当の人名説）人々に伝わる。そして無意識に伝承の役目を実現させ、ついに集団創作の過程で潜在意識を働かせて、そうすると、民衆は石敢当に対する認識は逐次変わってくる。もう一つ、風水師の口碑により解釈されていた。風水師は自らの職業の影響を受けた関係で、彼らから創作した「神話」は民間伝説の中に不可欠である。知識人は古代文献の記録により、しかも各時代の民間社会の格差により、石敢当を人々に伝え、これも石敢当風俗はいままでわれわれに伝来し続ける原因の一つと考えられる。中国大陸、台湾、日本本土、沖縄では、橋路を箭の譬えやら、或いは悪魔、悪風として、邪気は直線しか走らないなどさまざまな説がある。地域によって、意味は程度の差があるが、石敢当は厄を払うという古い意味は変わっていない、これは知識人が古代文献により民間に伝わった影響と思われる。五代力士「石敢」説の変形はずっと民間に伝わってきたのも、上述のような原因だろう。民間の解釈は階級層、地域、時代によって、解釈してくる内容も異なってくるから、実地調査する時に、この点を注意しなければならない。ほかには調査者の結論は聞き取り対象の異なりによって出された結論も異なる；もう一つは風水師、農民、農村教師など知識層の異なる聞き手から、石敢当に対する異なる認識を聞いた。でも、同じく、学術の意義と研究価値があると思う。

石敢当民俗は環東海（東中国海）に関連する民俗文化圏の中の一例である。中国大陸、台湾、日本本土、沖縄の間に繋がる民俗文化は闘牛、「賽龍船」、媽祖信仰、龍宮信仰、「屏風」（照牆）、建築儀礼、風水思想などがある。これらの民俗文化の関連する現象を比較研究すれば中日両国両民族の相互理解はもっと高まると私はそう考えている。

#### 注

- (1) 楊仁江「石敢当初探—台南地区石敢当实例」『台南文化』新24期，台南市政府発行，1987年12月。
- (2) 海江田正孝「厦門における石と驅邪」『民俗台湾』第三卷第二号。
- (3) 『同安県誌』卷二十二。
- (4) 王孝廉『中国的神話世界』作家出版社，1991年，191～194頁。
- (5) 許維民著『金門之度』設計家文化出版事業有限公司，1992年，109頁。
- (6) 国分直一『壺を祀る村—台湾民俗誌—』法政大学出版局，1981年，195～208頁。

- (7) 三島格「石敢当考」『民俗台湾』第二卷第十一号。
- (8) 石暘睡「台南の石敢当」『民俗台湾』第二卷第五号。
- (9) 鮑家虎「石千娘追記」『民俗研究』1990年1月。
- (10) 袁学駿主編『耿村民俗』中国民間文芸出版社, 1990年, 3頁。
- (11) 張為綱『江西南昌の民俗』, 中山大学『民俗』(復刊号), 第一卷第一期 1936年9月。
- (12) 林小麟, 黎少姬「広東南海民居与郷土文化」, 陸元鼎主編『中国伝統民居与文化—中国民居学術会議論文集』中国建築工業出版社, 1991年。
- (13) 周星「話説泰山石敢当」, 福田アジオ編『中国江南の民俗文化』, 国立歴史民俗博物館, 1992年3月。
- (14) 下野敏見『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版社, 1989年, 487～520頁, 545～546頁。
- (15) 陶陽等編『泰山民間故事大観』文化芸術出版社, 1984年, 196～206頁。
- (16) 倉田哲「石敢当その他」『民俗台湾』第四卷第八号。
- (17) 松田誠「石敢当の現況(Ⅱ) —宮崎編」川内新生社, 1986年, 55～57頁。
- (18) 都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」, 窪徳忠編『沖縄風水』, 1990年9月。
- (19) 松田誠「石敢当の現況(Ⅲ)」『鹿児島民具』第十号, 1992年。
- (20) 小熊誠「石敢当小考」載福田アジオ編『中国江南の民俗文化』1992年3月。
- (21) 崎原恒新「沖縄県の石の民俗」, 載堀川豊弘編『九州・沖縄地方の石の民俗』, 明玄書房刊, 1987年。
- (22) 松田誠『石敢当の現況』川内新生社, 1983年, 158頁。
- (23) 知覧町教育委員会発行『知覧町民俗資料調査報告書(一): 知覧町の民具』321頁。
- (24) 鄧尔雅「石敢当」『民俗』第四一, 四二合期。樊嶺「関与石敢当」『民俗』第六八期。汪宗衍「石敢当」『民俗』第七八期など。

## 付 記

本論文は平成3年度日本学術振興会外国人特別研究員として、「比較民俗方法論の基礎的研究」をテーマとして、一年間筑波大学民俗学研究室で行なった研究成果の一部である。受入れ教官の佐野先生はじめ、教室の教官・大学院生の皆様、現地調査でお世話になった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

また、このような機会を与えてくれました日本学術振興会、筑波大学歴史・人類学系に記して謝意を表したいと思います。



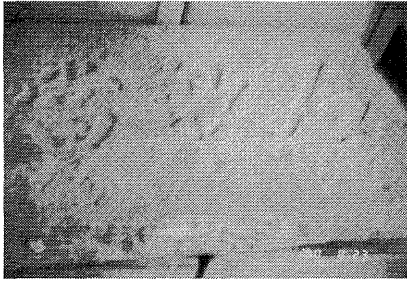


写真1 台湾成功大学歴史博物館の「石敢當」



写真2 台湾台南市の「石敢當」

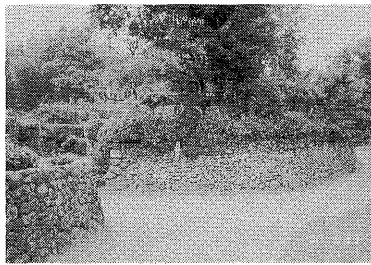


写真3, 4 鹿児島県入来町元文四年の「石敢當」

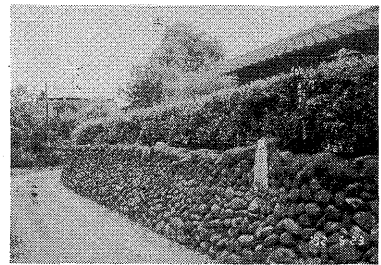


写真5 鹿児島県入来町小路の「石敢當」

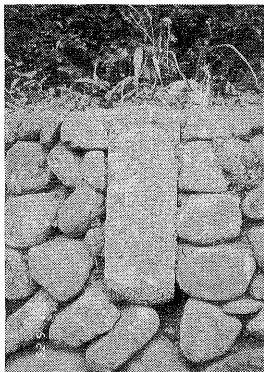


写真6 鹿児島県大口市の「石敢當」

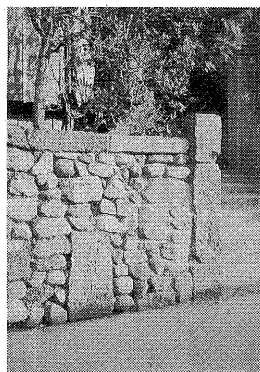


写真7 鹿児島県知覧町の「石敢當」



写真8 沖縄県那覇市の「石敢當」

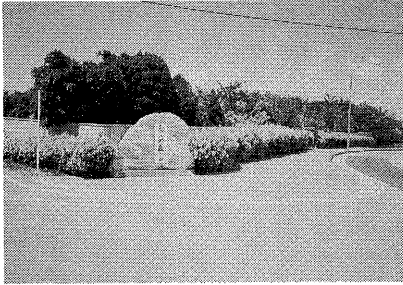


写真9 沖縄県石垣島の「泰山石敢當」

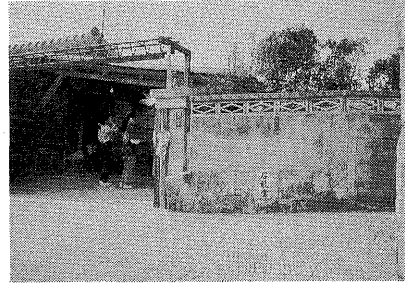


写真10 沖縄県南風原の「石敢當」

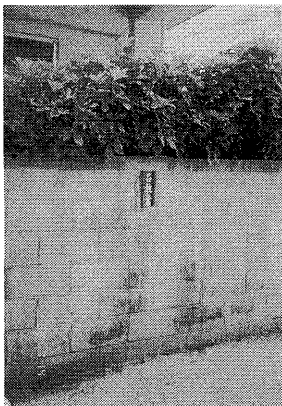


写真11 沖縄県南風原の「石敢當」



写真12 沖縄県黒島の「石敢當」

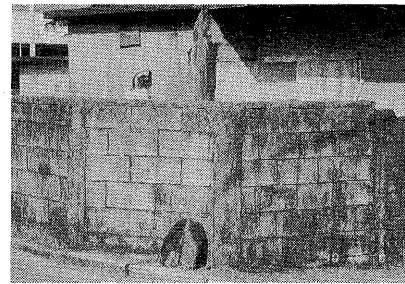


写真13 沖縄県小浜島の「石敢當」



写真14 沖縄県竹富島の「石敢當」

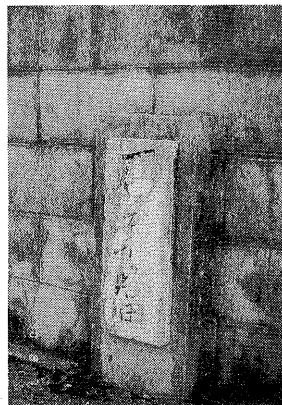


写真15 沖縄県石垣島の「石敢當」

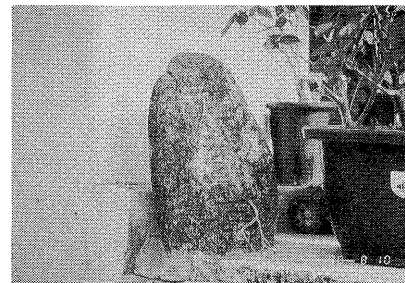


写真16 沖縄県石垣島の自然石「石敢當」

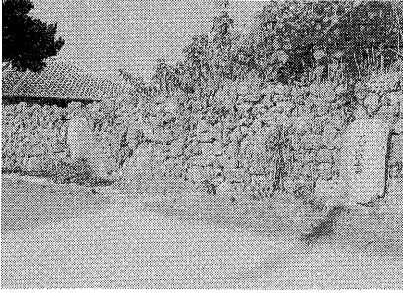


写真17, 18 沖縄県竹富島の「石敢當」

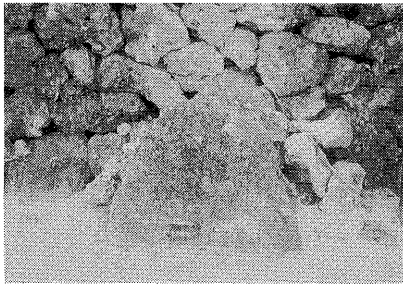


写真19 沖縄県小浜島の自然石  
「石敢當」

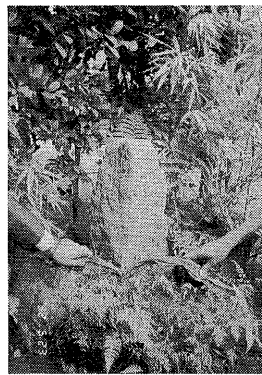


写真20 鹿児島県鹿児島市  
市下荒田の「石敢當」

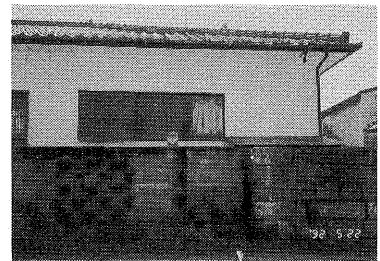
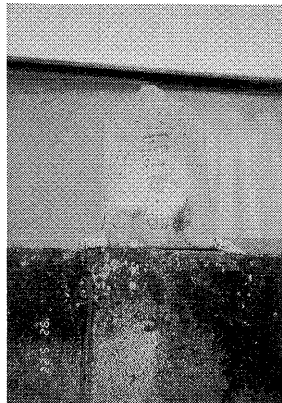


写真21, 22 鹿児島県山川町新生  
町の「石敢當」



写真23 鹿児島県入船町の  
「石敢當」



写真24 鹿児島県山川町の  
「石敢當」



写真25 沖縄県石垣島・車と  
「石敢當」

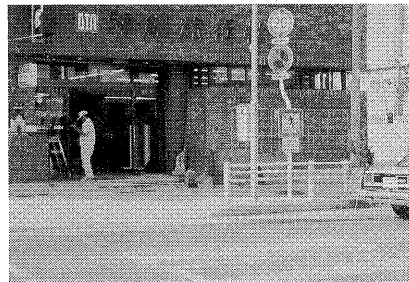


写真26 沖縄旅行社・入り口の  
「石敢當」

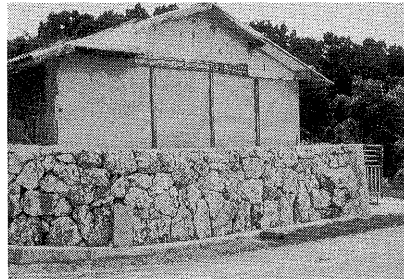
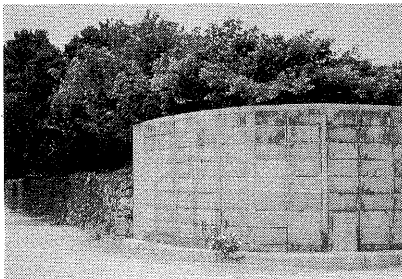


写真27, 28 沖縄県黒島・セメント製の「石敢當」

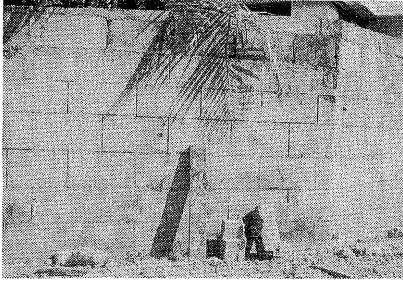


写真29 沖縄県黒島・板製の「石敢當」

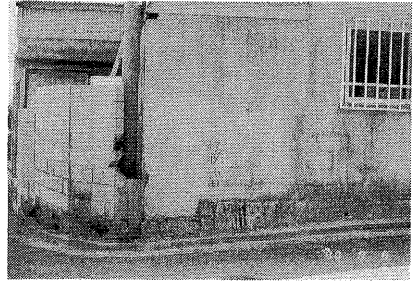


写真30 沖縄県小浜島・壁に刻んだ「石敢當」



写真31 沖縄県八重山  
博物館の「泰石石敢當」

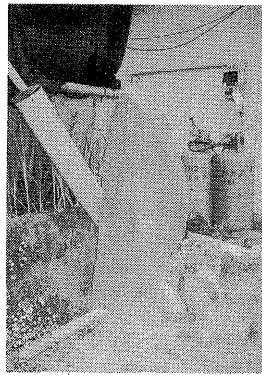


写真32 鹿児島県粟野町  
東下場の梵字「石敢當」

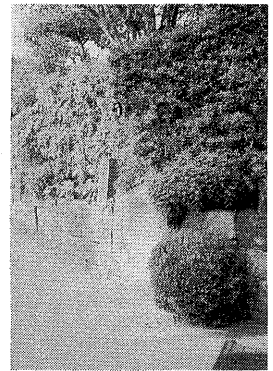


写真33 鹿児島県知覧  
町の「無字石敢當」



写真34 鹿児島県穎  
町の篆字「石敢當」

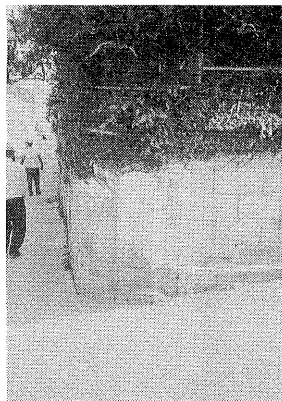


写真35 沖縄県南風原  
・石敢當

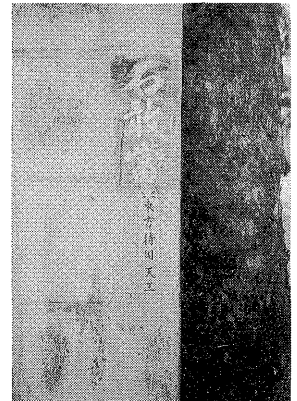


写真36 沖縄県南風原  
・石敢當・符咒